

出版人・ソ連文化プロモーターとしての大竹博吉の戦後

― 占領期・50 年代におけるナウカ社の活動

吉田則昭

本論文では、ロシア語図書輸入ならびにソ連に関する書籍・雑誌発行を行っていた出版社のナウカ社とその社主であった大竹博吉の戦後の活動を検討した。

戦前・戦後とナウカ社が歩んできた時期については、通常三期に区分される。評伝では、それは第一次、第二次、第三次のナウカ社の歩みとして記される。第一次ナウカは、創業した 1932 年から大竹が治安維持法で逮捕された 1936 年 9 月まで、ソ連図書の輸入販売と併せて、雑誌『文学評論』『社会評論』を創刊した時期である。第二次ナウカは、1945 年に出版社を再興、1946 年 1 月に『社会評論』を再刊、廃刊する 1949 年までとその後会社を閉鎖する 1951 年 12 月までの時期である。そして、第三次ナウカは、ロシア語書籍輸入を中心の業務として再スタートした 1952 年 9 月から、経営が行き詰まり破産・閉社する 2006 年までの時期である。

本論文では、戦後の第二次、第三次ナウカ社に関する国内外の一次資料を用いて、第一に、大竹が戦後日本の民主化と出版界民主化の活動に取り組んだ側面を取り上げた。第二に、国内出版事業に専念した時期の、総合雑誌『社会評論』復刊・終刊について焦点を当てた。第三に、占領期後期から 1950 年代、ソ連図書輸入再開によるナウカ社の再三の事業立て直し、大竹のソビエト文化普及活動について検討した。

以上、占領期から 1950 年代にかけての出版人・ソ連文化プロモーターとしての大竹博吉とナウカ社の活動を、従来にはない観点から再構成してみた。

Nauka Publishing Company and Ōtake Hirokichi during the Postwar Period : An Example of Adaptation of Soviet Culture in Occupied Japan to the 1950s

Noriaki YOSHIDA

This paper examines the activities conducted by Nauka Publishing Company, which took the initiative to import and publish journals in Russian, and Ōtake Hirokichi, who owned the company. The previous research divided company history into three parts: first, a foundational period (1932 to 1936); second, a restart period under occupation (1945 to 1951); and third, another attempt to function as a publisher, which mainly focused on importing books from Russia, ending with the eventual closure of Nauka due to financial difficulties (1952-2006). This paper emphasizes the influence of the second and third part of Nauka's publishing history. I will clarify how Nauka and Ōtake attempted to actualize democratization in Japanese society and publishing. In conclusion, we discover that Ōtake was not merely a publisher but also a promoter of Soviet culture during the postwar period in Japan.